
優等生

枝豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優等生

【Nコード】

N7116A

【作者名】

枝豆

【あらすじ】

勉強しかできない私に突然舞い降りたたくさんの感情。私は、どうすればいいの？

「また一位はあいつかよ。」

「すごいよな、秋南さんって。」

みんなが私のことを話している。今日は、中間テストの順番が貼り出される日だ。

私たちの学年のところを見ると、

「一学年 第一位^{アキナ} 秋南萌^{メグミ}」
と書かれていた。

私は、なぜか人より勉強ができてしまう。

正確に言くと、勉強しかできない。

もし、私が勉強さえもできていなかったら、私はいじめられていただろう。

チビでブスでデブで、おまけに馬鹿で。何のとりえもないただ一人の生徒だったら。

私は、こんなことでしか自分を保ってられないのだから。いい点数を取って、大人たちにほめられることでしか自分の価値を見つけられない。小さい小さい、一人の子供。

ある日、学校にやってきて突然声をかけられた。

「秋南萌。」

私はすぐに振りかえった。テスト前と後ぐらいにしか声をかけられたことがなかった。

そんな私に、声をかけてくるとは。不思議な人もいるもんだ。

「何?」

「俺、絶対次お前抜くから。」

そう言うとは彼は、足早に去っていった。

彼は、安藤慶吾。テストでは、万年二位。彼も、私をライバル視していたのか。

少しあきれて、彼が去っていった場所を見る。

私には、よくこういうことがある。

いきなり出てきて、勝負を挑まれる。

私は、別に勝っても負けても関係ないから本気を出さずにいて挑んできた人たちに負けてしまう。

そうすると、相手に逆切れされてしまう。

最後には、呆れられてしまう。

「失望したよ。」

何度この言葉を聞いたことか。

私に言わせれば、「お前ら勝ちたかったんじゃないの？良かったじゃん、勝てたんだから。」

と、去っていった人たちを見て呆れてしまう。

安藤も、同じタイプだろう。

期末テスト、結果発表当日。

「マジですか。」

「あの、秋南さんが。」

そう、私は負けてしまった。

今回は手を抜いたわけではなく、いつも以上に勉強をした。

そしたら、この結果だ。

「第二十五位 秋南萌」

最悪だ。勉強しかとりえがない私が、手を抜かずこんな順位を取ってしまうなんて。

「よう。秋南萌」

安藤が近寄ってくる。

私は、いきなり顔が真っ赤になっていく。

恥ずかしい。期待してもらったのに、こんな順位しか取れなくて。

「ゴメン、安藤。」

私は、逃げ出した。誰もいない安心できる場所へ。

「おい、秋南。」

安藤が追いかけてくる。

「何で、追いかけてくるのよ。」

「お前が、いきなり逃げるからだよ。それに……。」

安藤が、言いよどんだ。

安藤がモゴモゴ言っている間、私は、図書室へとたどり着いた。ここは静かでいい。一人が好きな私にとっては。

「オイ、秋南何やってるんだよ。」

「だって、私には勉強しかないのに……。」

「はあ？何言ってるの？」

「だって私には勉強しかないのに、勉強でも負けたら私はどうすればいいの？」

安藤が、ため息をついた。

「そんなわけないだろう？秋南には、秋南の良いところがあるし、自分で気付かないだけだし。」

「そんなわけ……。」

「あるんだよ。だから、俺は勝負という口実を作って秋南に話しかけたんじゃないか。」

「は？何言ってるの？？」

「だから……。お前が、好きだって言ってるだろう！」

安藤が、扉を開けてすぐ近くに立つ。

「私好きだとか言う感情持ったことがないから、すぐ安藤のことそうゆう風に見えない。」

「そっか……。」

「でも、もう少し時間をください。」

「え？」

「だから、時間さえあれば安藤のこともと知れるし、そうすれば私が安藤のこと好きかどうかもあるし。」

「つまり……？」

「考えときます。」

「分かった。じゃ、いつかまたちゃんと告白します。」

「うん。お願いします。」

私と、安藤の友達以上恋人未満の関係は続く。

（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

これは、いつもテストの点を聞いてくるある男子がもしこういう感情を持っていたら面白いなあと、思い書いてみました。評価や、感想を待っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7116a/>

優等生

2010年11月17日14時28分発行